

東京オリンピックと住民の強制退去

写真は『DAYS JAPAN』12月号の「特集 非常なる東京オリンピック」。都営霞ヶ丘アパートから強制退去させられた高齢者らを取りあげる。

何年か前の雪の積もった日、ここを訪ねたことがある。破壊されたアパートの写真などを見て、悲しくなってきた。



建設中の新国立競技場を訪れると、最近まで全体を覆っていた足場が外れ、新聞などを通して何度も見た完成予定図のあのスタジアム外観が現れる。建て替えを巡り色々とおっただけに、外観を見るだけでここまで来たかという気分にもなる。道を一本挟んだ先には大成建設の現場事務所があり、忙しく仕事をしているが、ここに3年前までは10棟の古びたアパートが建っており、120世帯ほどが生活をしていました。



その住宅は「都営霞ヶ丘アパート(団地)」といい1964年のオリンピックの際に再開発の一環で建てられた住宅で、近年は平均年齢65歳を超える高齢者団地となっていた。原宿に近く、競技場のすぐ隣り合わせだったが、団地の中に入ると、不思議と喧騒が消えた。……都会の真ん中にポツンと取り残された地方のさびれた町のようなであった。住民に話を聞くと団地自慢が始まる、「ここは本当に良いところ。昔から住んでいる人が多く、みんな高齢者だから支え合って生きている」

2012年7月、共生する高齢者たちのもとに東京都から「移転のお願い」という文章が届いた。国立競技場の建て替えが必要でその敷地に霞ヶ丘アパートが含まれているため移転要請する。その後告げられた条件は、移転費用は17万1千円(その他の補償金は一切なし。引越し代だけで17万円を超え、多額の自己負担を余儀なくされた)、住民がまとめて入居できる住宅はなく3箇所の都営アパートに別れてもらう。

80代男性が記者の前で発言している。「終の住処と思いこのアパートに住んでいる。私は前回64年のオリンピックの時にも別の場所で立ち退きにあった。その時は若く、国策に協力をしようと思いこの霞ヶ丘アパートに移転したが、今は状況が違う。オリンピックによってなぜ二度も住まいを奪われなくてはいけないのか」

50年前にも同じことがあったのだ。国立競技場の周りがあった老朽住宅が立ち退きにあい、その移転先の一つがこの都営霞ヶ丘アパートだった。

(2018年12月7日)